



The Pragmatics Society of Japan  
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.42 / Autumn 2019

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 国際言語文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 secretary -at- pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名：日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

## 《追悼 西光義弘先生》

### 追悼：博言学の継承者 —西光義弘先生を偲んで—

山梨正明（日本語用論学会 元会長）

学問の世界での良き先達、良き理解者に出会えることは、研究に携わる者にとって何よりの幸せである。西光先生は、私にとってそのような素晴らしき先達のお一人である。先生は、言葉の世界の真理を探求する言語学者であるだけでなく、言葉の世界を心から楽しまれた博覧強記の言語学者であった。今は、言葉の世界を奥深く、広い視野から楽しみながら研究していく「博言学」という言葉を知っている人は少ないが、先生は本当の意味でこの博言学の伝統を継承する研究者であった。

西光先生の学問的な学識の広さを示すエピソードとしては、先生が最新の言語学の書物に目配りをされるだけでなく、楽しみの一つである古本屋めぐりを通して、言葉と関連分野の古典的な文献を収集されていたことを思い出す。私も古本屋めぐりが好きなので、今でもいくつかの店を覗くことがあるが、先生の古本屋めぐりは実に幅広く、お住まいの阪神間だけでなく、京都の古書めぐりもされていたことを記憶している。もう10年以上も前になるが、偶然、京都の河原町通りの古本屋で西光先生とお会いしたことがある。先生は実に嬉しそうに手に入れ

た古書を抱えながら、まるで子供が宝物を手に入れたように誇らしげに見せてくれたのを記憶している。

西光先生のこの古本屋めぐりから、私は実に多くの恩恵を受けている。懐かしい話になるが、先生は、手に入れた古書の一部をよく学会の一室の机に並べて「叩き売り」をされていた。その学会というのは関西言語学会であるが、先生のこの叩き売りから、信じられないほどの安い値段で言語学と関連分野の古本を買わせていただいた。今思えば、私がこの学会に行く楽しみは、研究発表を聞きに行く以上に、西光先生の（叩き売りの）「古本市」を覗くことだったと思う。私は、先生のこの古本販売に最も貢献（?!）した客の一人、と自負している。今でも、拙宅の書架には、この古本市で手に入れた貴重な書物が並んでいる。私のこれまでの研究の一部は、先生の古本市から多大な学問的恩恵を受けている。

西光先生からいただいた学恩はこれに尽きない。先生は、学界において人の和を大切にされる関西の学問的な伝統を引き継ぐ研究者のお一人であった。先生ご自身は確か広島出身と聞いているが、学生時代から阪神間で学ばれ、関西風の学問の和を大切に研究の場を作り上げてこられた。関西風の研究の和は、学問的のどのような立場にあっても絆を解いて仲良く付き合っていこう、という大人の精神に通じる。先生はこの和の精神で、関西圏の学界をリードして下さいました。私も、西光先生を含む多くの関西圏の

先生方から、学問的な和の精神を学ばせていただいた。

この和の精神は、日本語用論学会の設立にも関係している。現在の本学会の会員の大半の方はご存知ないと思うが、日本語用論学会は、京阪神の大学の先生方が意気投合して設立委員会をつくり、地道な準備期間を経て本学会の設立に漕ぎ着けている。(語用論学会の設立の具体的な経緯に関しては、本学会のニューズレターで二度ほど報告したことがあるので、宜しければそのバックナンバーを読んでいただきたい。)西光先生は、この学会の設立をあたたく支援して下さったお一人であるが、本学会の誕生は、この関西の学問的な和の精神に負うところが大きい。私は静岡出身であり、育った文化圏は関西ではないが、京阪神の先生方とお付き合いさせていただき、今日に至っている。特に西光先生は、このかけがえのない先生のお一人であった。先生の突然の訃報に接し、非常に大きな支柱を失った思いで一杯である。西光先生の学問的精神を引き継いでいくことが、先生の学恩に報いることにつながると信じている。ここに心より先生のご冥福をお祈りしたい。

(山梨正明)

## 追悼：西光義弘先生

山本英一（関西大学）

本年7月23日、本学会の功労者のお一人でもあり、また私にとっては、とても大切な先輩でもあった西光義弘先生がご逝去されました。昨年からは体調を崩され、親しくしている同僚からは、入退院を繰り返しているとの知らせを聞いていたものの、「電話を通して久しぶりに西光先生らしいお声を聞くことができた」という話を聞いて喜んだ直後だっただけに、突然の先生の訃報に絶句してしまいました。

西光先生は、私とはちょうど10歳年上で、大阪外大を1970年に卒業されました。在学中にサンケイカラシップでアメリカのインディアナ大学・言語学科に留学された先生は、その後1972年に神戸大学に奉職され、2010年に定年でご退職になるまで、同大学で言語学の研究と教育一筋の人生を歩まれました。

西光先生との出会いは、私が大阪外大の大学院に入学した1980年のこと。恩師・林栄一先生がゼミを土曜日の午前中に開かれ、午後からは院生（といっても、私を含めて3人）だけが集まって勉強会・輪読会をするのが定例となっ

いて、その場に先生が毎回お越しになっていました。きっと林先生に頼まれてのことと思いつつ、熱心にボランティアで指導してくださる先生は、私たちにあって、まさに近づきたい「兄貴分」のような存在でした。何よりも、皆が舌を巻いたのは、チョムスキーのことはもとより、当時の言語学で話題になる研究者のこと、そしてその著作・論文のことをよくご存知で、何を聞いても（というか、私たちが聞く前に）ポケットから次々と情報がまるで魔法のように出てくることでした。

今のように、インターネットで検索したり、電子ジャーナルにアクセスしたりして、必要な情報が簡単に手に入る時代ではありませんでした。そんな中、先生が勉強会に持って来られたのは、Paul Griceの“Logic and conversation”。まだAcademic Pressから本の形で出版される前のタイプ原稿で、私たち学生にとっては、まさに垂涎の論文でした。しかし、いったん読み始めてみると、学部を終えているとは言え、駆け出しの言語学研究者である(少なくとも)私にとっては難解で意味不明。懇切丁寧に解説してくださる西光先生の言葉もほとんど理解できず、文字通り「歯が立たない」と思った記憶があります。それでも、私が語用論の世界に入るきっかけの一つは、この論文にあったのだと、今では感慨深いものがあります。

先生が蔵書家であることは、どなたもご存知かと思いますが。家中に本が溢れかえって、お父様が「何とかして欲しい」とこぼされているという話を、あるとき林栄一先生から聞いたことがあります。昨年の関西言語学会(KLS)の年次大会では、他の出版社に並んで、「先生、今年も『西光書店』、出店されますか？」とお聞きしたところ、自動車にいっぱい本を積んで会場に来られ、研究発表を聞くかわら、店主役も務められていました。売れ残った本を、また台車に積んで車まで運ばれるときの先生は、「本当に本が好きで仕方がない」と言わんばかりの笑みを浮かべておられました。そのとき、「また来年もお願いしますね」と先生にかけた言葉が、先生への最後のメッセージになるとは思ってもみませんでした。

西光先生の思い出は尽きることがありません。天国でも、故人となられた恩師の方々と言語学談義を続けられている姿を思い描きつつ、先生のご冥福を心よりお祈りしたいと思います。

合掌。

(山本英一)

## 《特集 語用論研究の新潮流》

## 語用論研究の新潮流 (1)

井上逸兵 (慶應義塾大学)

「語用論研究の新潮流」のリレー連載とのことで、私が第一回目という栄誉を授かった。昨年の本学会大会での「語用論グランプリ！」で優勝させていただいた(過剰敬語でなく!)ご褒美(もしくは罰ゲーム?笑)なのだろう。エッセイ風でもかまわないとのことなので、ちょっとばかり大胆に書いてみたいと思う。

すでに「新」潮流と言えるかわからないが、言語学、語用論だけでなく、世の中をいま大きく変えているのは、まちがいにインターネットであり、いわゆるデータサイエンス等のテクノロジーである。これらは我々の生活を大きく変えた。そして、スマートフォンの普及によって、その変化は我々の生活の奥底まで入り込んでくることになった。

これらのテクノロジーが生み出したものの一つはひとことと言えばグローバル化ということだ。もちろん、コミュニケーション活動自体のグローバル化もそれにあたる。その裏返し、異言語間の対照は、特に前世紀最後の四半世紀を中心にしばしば社会言語学的な語用論の材料にされてきた。その一方で、21世紀最初の四半世紀の語用論にとってよりレリヴァントだと思われるのは、Global Text と呼ばれる、自動翻訳、機械翻訳に適合させた英語に象徴されることばへの意識の変化である。

たとえば、多言語展開をする企業にとって、社内外の文書、トリセツなどの翻訳のコスト削減は経営的な要請である。機械翻訳されやすい英語でいったん文書を作り、そこから多言語に機械翻訳するというのが多言語展開をする企業ではいまや常識になっている。外国の製品の説明書で時に奇怪な日本語の説明を目にするのはそのせいである。

現時点での機械翻訳の水準で起こっている現象は、人間の方が自分のことばを機械に適應させるようとしていることだ。翻訳してもらいやすいような日本語を入力する。音声認識のプログラム(アプリ)に対しても機械に聞き取ってもらいやすいように発声する。機械は我々のしもべではなく、我々が機械サマのご機嫌をうかがっている状態だ。

興味深いことに、このような現象は、機械に対するだけではない。多国間のコミュニケーションを必要とする企業では、非英語圏の外国

にビジネスレターを書くのにいったん英語で書いて、それから目的の言語に翻訳することがよくある。英語は重訳の仲介言語である。それぞれの言語固有の間接的な言い回しは避けられる傾向にある。

このような事態は国際的な企業で起こっている一方で、一見無関係なようだが、日本人だけで構成されるような職場や学校でも起こっている。かつてなら激励に解釈されたかもしれない部下や生徒に対する、過度な叱責が字義的な解釈をされて問題となったりすることが多くなった。学校で「(やる気ないなら)帰れ」、「出てくるな」という教師の(愛に満ちた?)叱責が、「帰宅命令」、「登校停止」と解釈され、親も含めてトラブルになったりする。

21世紀の少なくとも最初の四半世紀の「グローバル化」は20世紀のそれがそうであったように「アメリカ化」ではない。あらゆることが可視化され、アクセス可能になり、監視され、いわば「標準化」される。コンプライアンスなどということばが企業でも学校でも常識になってきた。腹芸やあうんの呼吸的なものは衰退してきている。ついでながら、CDAなどの言語研究の標的であったマスメディアの役割は弱まり、ある種の特化されたメディアになる。テレビのコンテンツでおそらく最初に消えるのはニュース番組だろう。すでに「インターネット世代」からの信頼は失われている。

企業から学校、個人のコミュニケーションまで広汎に起こっているこれらの「潮流」の根元にあるものは、繰り返すが、インターネットとそれによってつながる大量のデータだ。「グローバル化」は「ビッグデータ化」でもある。言語学、語用論の文脈で、これらが意味することは、テクノロジーをいよいよ実装した広義の用例基盤の時代を迎えつつあるということだ。ボトムアップの用例基盤、事例基盤が生成文法のアンチテーゼであるのは、たんなる概念や志向としてではなくなる。

チョムスキーがいかにか天才だとしてもしょせん人間だ。トップダウンの思考はできても膨大なデータに基づいたボトムアップ処理は人間だけでは限界がある。言語学、語用論はそれを可能にするテクノロジーを、いま手にしたところだ。

20世紀の言語学は四半世紀ごとにパラダイム転換の主張がなされてきた。20世紀初頭のソシュール、1920~30年代の行動主義、アメリカ構造主義、1957年を皮切りとする生成文法、1970年代の生成意味論を経て1980年以降の認知言語学と流れてきた。2019年のいま、21世紀最初の

四半世紀のトレンドがはっきり見えてきた気がする。

(井上逸兵)

(12:30～13:30 : 昼食休憩)  
13:30～16:00 : シンポジウム  
16:00～16:15 : 閉会式

\*\*\* 日本語用論学会第22回大会ご案内 \*\*\*

2019年度の第22回大会は、以下のとおり、京都外国語大学で開催します。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

- ◆ 日程 : 11月23日(土)、24日(日)
- ◆ 場所 : [京都外国語大学](#)  
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

- ◆ 大会テーマ :  
「言語の共有・進化・適応をめぐる語用論」

- ◆ 大会参加費 :  
会員・一般 事前登録:1,000円 当日:2,000円  
会員・院生または学部生  
事前登録:無料 当日:2,000円  
非会員・一般 当日:2,000円  
非会員・院生 当日:2,000円  
非会員・学部生 当日:無料

- ◆ 主なプログラム
- 11月23日(土)
- 9:30～: 受付開始
- 10:20～12:00: ワークショップ
- 11:30～12:40: ポスター発表  
(休憩 20分)
- 13:00～13:35: 口頭発表 1
- 13:40～14:15: 口頭発表 2  
(休憩 15分)
- 14:30～15:05: 口頭発表 3
- 15:10～15:45: 口頭発表 4  
(休憩 15分)
- 16:00～16:20: 会員総会
- 16:20～17:50: 基調講演  
(移動 10分)
- 18:00～20:00: 懇親会
- 11月24日(日)
- 8:30～: 受付開始
- 9:00～9:35: 口頭発表 5
- 9:40～10:15: 口頭発表 6
- 10:20～10:55: 口頭発表 7  
(休憩 20分)
- 11:15～11:50: 口頭発表 8
- 11:55～12:30: 口頭発表 9

【基調講演】

Dr. Istvan Kecskes

[“English as a Lingua Franca: The Pragmatic Perspective”](#)

シンポジウム

[『音声・言語・こころ: ヒトのコミュニケーションの進化的起源をいかに捉えるか』](#)

登壇者: 岡ノ谷一夫(東京大学)  
香田啓貴(京都大学)  
橋彌和秀(九州大学)

【ポスト・コンファランス】

大会終了後の月曜日の午後、ふたたび Kecskes 先生に、インフォーマルな講義をしていただきます。

Dr. Istvan Kecskes

[“The socio-cognitive approach to pragmatics”](#)

場所: 京都外国語大学 R941 (9号館・国際交流会館 4階会議室)

(当初アナウンスしていたキャンパスプラザ京都から、[京都外国語大学](#)に変更になりました)

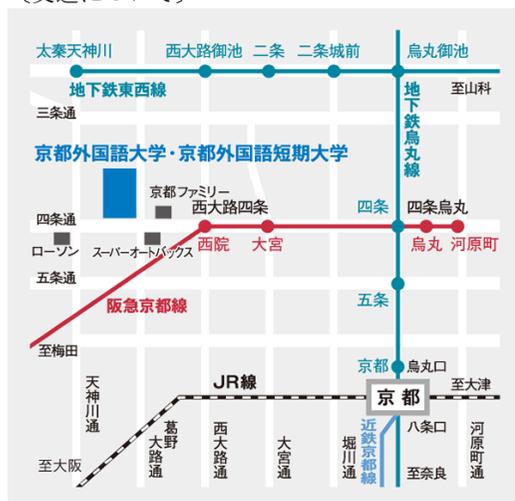
時間:  
14:30 受付開始  
15:00～16:30 講演

※ 口頭発表資料の事前ダウンロードについて  
第22回大会では、口頭発表の発表資料を事前にダウンロードできるよう準備を進めております。詳しくは事前の ML 等でアナウンスいたしますので、ご確認ください。

- 「語用論茶寮 [サロン]」、またやります！  
前回大会で好評を博した(?)「語用論茶寮 [サロン]」を、今年度も設置します。  
「話し相手」も開設時間もともに拡大して、より手厚い(?)よろず相談所としますので、皆さまぜひお気軽にお立ち寄りください！お待ちしております！  
(文責・「語用論茶寮 [サロン]」担当(?)の滝浦真人)

## ◆第22回大会会場・京都外国語大学への交通・宿泊について

〔交通について〕



〔交通について〕

- ★阪急京都線「西院」駅から西へ徒歩約15分。または市バス「西大路四条」(西院)から3・8・28・29・67・69・71系統に乗車、「京都外大前」で下車。(所要乗車時間約5分)
- ★JR線「京都」駅烏丸口から市バス28系統、八条口から市バス71系統に乗車、「京都外大前」で下車。(ともに所要乗車時間約30分)
- ★地下鉄東西線「太秦天神川」駅から南へ徒歩約13分。

〔会場について〕

- ★会場は正門を入れて左手すぐの1号館です。懇親会会場のみ、1号館に隣接する4号館の6階となります。
- ★周辺には、ショッピングモールや飲食店、コンビニなどがありますので、昼食の心配は無用です。



〔宿泊について〕

この時期の京都周辺のホテルは例年混み合いますので、予約は早めにお願ひします。場合によっては大阪府や滋賀県のホテルでもJR京都線・琵琶湖線の沿線なら比較的短時間でご来場になれます。交通機関を確認のうえ、ご利用ください。

\*\*\*国際学会報告\*\*\*

## 第16回国際語用論会議 報告

小野寺 典子 (青山学院大学)

IPrA (国際語用論学会)の研究大会である国際語用論会議が、今年6月9日から14日まで、香港理工大学で開催された。折しも、民主化運動のデモが8日に始まり、会議終了後に渡り激化したが、開催に影響を受けなかったことは幸いであった。香港の九龍地区にある、最新設備を誇る理工大学に、1100人以上の会員が集まった。

今年のテーマは、Pragmatics of the Margins (周辺の語用論)と題され、「ポストコロナ状況下での様々な現象の語用論」とか、「語用論は、いかに西洋 (metropole) に認識・知識の主導権を奪われずに済むか?」など、地域色豊かな文言が並び、開催前には当学会でも少々の違和感を持った人もあったようではあった。

香港の連日の蒸し暑さも、会場の最先端設備の中は快適そのもので、隔年の会議で再会を楽しむ輪がそここにあり、いつものIPrAと何ら変わらない風景であった。

発表内容の概観。伝統的な「発話行為・男女差・比喩・ダイクシス」などもあったが、談話分析・会話分析、またマルチモーダル分析の手法に伴い、「順番交替・助詞の使用・終助詞・人称代名詞」といった、これも伝統的なトピックから、より新しい「談話標識・(イン)ポライトネス・歴史語用論」、かなり新しい「AI時代の談話、アイデンティティ構築(construction)」などのトピックも見られた。詩的言語使用・認知語用論・ポライトネスの通時的考察なども見られた。扱う談話の場面もますます多岐となり、「教室の・電子媒体の・法的・職場の・学術」談話や、談話と政治などがあった。9日、preconferenceとして「東アジアの語用論」シンポジウムが行われ、盛況を呈したが、香港・中国・台湾・韓国・日本に共通して、電子化媒体の言語を対象とした研究の増加が報告されていた(こちらの詳細は、『語用論研究』Vol.21(次号)をご参照下さい)。

対象言語は、さすがにアジアの言語もいつもより少し多く見られたようだった。ひとときわ中国語(Mandarin)の分析は多く、中国人の方の発表数は際立っていた。日本・韓国からの発表も次いで多く、タイ・インドネシア語の分析もあった。もちろん、英・西・仏・伊語、ポーランド・ハンガリー・デンマーク語など西洋の言語の観察も、いつに変わらず発表された。

第2回 John J. Gumperz 研究賞が、スタンフォード大学名誉教授 Elizabeth C. Traugott 氏に贈られ、受賞の辞に、インタラクション観察の重要性を述べられたことは印象的であった。

(小野寺典子)

## 中国語用論学会 (China Pragmatics Association: CPRa) 交換派遣 報告

鍋島弘治朗 (関西大学)

首記、8月17日(移動日)18日、19日で、18日の朝に50分(うち質疑応答10分)の招待発表を行ってきました。こちらは2年に一回、交換の形で行われているもので、今回で3回目になるうかと思えます。学会の場所は、上海から新幹線で3時間程度の南昌師範大学でした。

会議は朝、8時から始まり、なかなかハードでした。また、政府の規定があるのか、夕食にも一切、酒類ができませんでした。陳新仁会長や数名の副会長、今度、日本語用論学会にいらっしゃる2名の先生方にも直接、お会いでき、ご本人やグループの研究内容(お一方は語用論の本流、もうお一方は会話分析)を聞くことができました。次回は2年後に大連で行われる予定とのことです。

(鍋島弘治朗)

### \*\*\* 研究会コーナー \*\*\*

#### ◆ 関東地区研究会

井上逸兵先生より世話人の大役を引き継ぎましたが、大変申し訳ないことに、まだ今年度の研究会について詳細が未定となっております。決まり次第、ML等で皆さまにご報告致します。

(文責:尾谷昌則)

#### ◆ 中四国九州地区研究会

2019年7月13日(土)13時から17時、九州大学伊都キャンパス・イーストゾーンにて、今年度第1回日本語用論学会九州山口地区研究会

が開催され、3名が発表した。以下、発表者の氏名(所属)、発表タイトル。1. 単艾婷 タンアイテイ(九州大学非常勤講師)、「日本人中国語学習者の課題作文における結束性に関する分析—中国人母語話者との比較を通して—」、2. 呉青青ゴセイセイ(九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程)、「「笑い」を伴う情報要求連鎖の第3位置における他者発話の繰り返し—「～を笑うこと」を伴う会話における他者発話の繰り返しに着目して—」、3. 塩田裕明 シオタヒロアキ(久留米大学文学部講師)、「話法とレトリック」。司会は西田が担当した。

第一発表は、日本人中国語学習者の課題作文を取り上げ、学習者の作文の結束性(cohesion)に着目した分析と考察で、中国人母語話者の作文との比較により、日本人学習者の誤用の傾向と原因を特定するという内容だった。特に日本語の「そして」に当たる中国語の用法に着目した点に興味深かった。第一発表が書き言葉を扱ったのに対し、第二発表は動画資料を基に話し言葉に焦点をあてていた。具体的には、笑いを伴う会話における他者発話の繰り返しに着目し、その機能を分析することで、「からかい」という行為が達成される際の会話構成の特徴を解明しようと試みていた。親しい仲間との会話で先行発話を繰り返すときの口真似や顔の向きに着目する点に工夫が見られた。第三発表は日英比較で、議論的談話と日常談話における話し手が用いる話法とレトリックの関係を考察した内容だった。特に発話動詞の時制や、「こういう」と「そういう」といった直示語の使い分けを基に、政治家の討論に特徴的なレトリックを明らかにしようとする点がユニークと思われた。

九州大学の松村瑞子教授をはじめ、計11名が参加し、活発な議論が続いた。学会からのメール案内を見て、今回、初参加した研究者もいて、今後の研究会の継続にとって明るい材料になった。

(西田光一)

#### ◆ メタファー研究会

メタファー研究会では、日中対照メタファー研究論と称し、日本認知言語学会のワークショップとして、アメリカの中国語メタファー研究第1人者、Professor Ning Yuにお越しいただき、日時:2019年8月5日(月)10:00-12:20、場所:関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス B号館202教室で日英対照メタファー研究および構成的メタファー理論についてお話いただきました。参加者は約40名でした。

これに続いて、Ning Yu のデータに対応する日本語研究、日本語と中国語の類似、相違を特定のメタファーで行う研究を2つ日本の中国人若手研究者からご発表いただき、Ning Yu, 篠原和子、大堀壽夫のお三方とフロアを交えて、日中メタファーの比較、メタファーの対照研究の方法論、メタファーの普遍性と相対性についてご議論しました。内容は以下の通りです。

KJ Nabeshima, Kansai University (鍋島弘治朗、関西大学) and Satomi Arizono, Nagoya Gakuin University (有菌智美、名古屋学院大学)

IMPORTANCE IS SIZE, IMPORTANCE IS WEIGHT, DIFFICULTY IS WEIGHT and DIFFICULTY IS SOLIDITY metaphors in Japanese, and cultural body part study of te (手) “hand” in Japanese.

Ning Yu, Pennsylvania State University (ニン・ユ、ペンシルバニア州立大学)

Analyzing Metaphor Systematically: A Comparative Approach

(i) IMPORTANCE IS SIZE and IMPORTANCE IS WEIGHT, and (ii) DIFFICULTY IS WEIGHT and DIFFICULTY IS SOLIDITY metaphors in Chinese and English. (40 min)

Li, Wenxin, Tsukuba University (李文鑫、筑波大学)  
Different construals of Force-schema applied to body in Japanese and Chinese. (20 min)

Xia Haiyan, Kanagawa University (夏海燕、神奈川大学)

Negative Experience and Proactive Control: Personal Space and the Semantic Extension of Verbs in Japanese and Chinese. (20min)

コメンテーター

Kazuko Shinohara, Tokyo University of Agriculture and Technology (篠原和子、東京農工大学)

Toshio Ohori, Keio University (大堀壽夫、慶應義塾大学)

(鍋島弘治朗)

### \*\*\*委員会より\*\*\*

#### ★大会運営委員会プロシーディングス担当より

日本語用論学会では、2005年度第8回大会より『大会発表論文集』を発行しておりますが、2018年度第21回大会の論文集は、本年6月に学会のホームページで公開されました。

掲載された論文数をご報告いたします。

研究発表（日本語）19本

研究発表（英語）3本

ワークショップ発表（日本語）8本

ワークショップ発表（英語）該当なし

ポスター発表（日本語）6本

ポスター発表（英語）該当なし

合計で36本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

(竹田ら)

### 《事務局より》

#### ★会費納入のお願い

◆年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円でございます。11 月末までに、ご納入いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下の通りです。

#### 【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

#### 【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能でございます。

会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

[psj@outreach.jp](mailto:psj@outreach.jp)

2017 年度から年会費を変更させていただきました。また三井住友銀行の口座は閉鎖させていただきました。ご負担をお掛けいたしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### ★激甚災害被災会員の皆様の会費・大会参加費免除について

日本語用論学会では、令和元年度の台風 15 号ならびに台風 19 号等の激甚災害、またはこれに準ずる災害で被災された会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「年会費」ならびに「年次大会の参加費」を免除させていただきます。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈りしております。

免除申請先（メール、郵送、電話のいずれも可、まずはご連絡いただけましたら手続きの詳細をご連絡させていただきます。）

日本語用論学会事務局

〒606-0847

京都市左京区下鴨南野々神町1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部

英語英文学科 小山 哲春 研究室内

E-mail: [secretary@pragmatics.gr.jp](mailto:secretary@pragmatics.gr.jp)

Phone: 075-706-3670

★PSJ 公式 HP リニューアルのお知らせ(再掲)

1. 新 HP への移行と電子投稿システムの運用開始

語用論学会のホームページがリニューアルされましたので、どうぞご活用ください。

<http://www.pragmatics.gr.jp/> (URL は変更なし)

新しい機能として、会員専用ページから学会誌『語用論研究』への論文投稿ができるようになりました。また、会員専用ページから大会発表応募や参加申込みもできます。年会費のカード払いも以前同様可能です。

2. 会員専用ページへのログイン方法

新 HP の会員専用ページは、セキュリティ強化のため二段階認証になっています。ログインは以下の通りにユーザ名/ログイン名、およびパスワードを入力して行ってください(すべて半角小文字)

第一段階認証:

ユーザ名(user): basic

パスワード(password): psj

第二段階認証(マイページログイン画面)

ログイン名: 学会にご登録のメールアドレス

パスワード: 以前通知してあるもの

パスワードを忘れた場合は、「パスワードを忘れた方」をクリックすると新しいパスワードが登録されたアドレスに送信されます。マイページ(会員専用ページ)で登録情報の確認・修正をお願いします。

★《新刊・近刊案内》★

■『[ウソと欺瞞のレトリック ～ポスト・トゥールース時代の語用論～](#)』山本英一(著) 関西大学出版 (定価 2600 円 + 税)

筆者は、これまで「ウソつきとかペテン師とか、不誠実なコミュニケーションをする人間に、散々苦しめられてきた」とまえがきで述べている。しかし、そのような輩が用いる「ウソや騙しの手口の(発話)」を冷静かつ学問的に分析してみると、そこに妙な規則性があるこ

とに気付き、それが本書をまとめるきっかけになったという。



Colman と Kay による有名な「ウソの定義」を紹介するとともに、語用論の視点からウソについて詳説する第2章。グライス理論や関連性理論といったこれまでの語用論の枠組みでは十分に処理できないという「騙しの談話」(Deceptive

Discourse)の中でも、特にミスリードに焦点を当てて分析する第3章。流行語にもなった「忖度」の特殊性について推論という視点から語る第4章。アブダクションや極小限定という視座から、欺瞞のレトリックの本質に迫る第5章。松本清張の「砂の器」や「点と線」、さらにはシャーロック・ホームズといったミステリー作品に巧妙に仕掛けられたミスリードの罠を紹介しながら、ヒューリスティックの観点からその本質に迫る第6章。いずれの章でも、多彩なレトリックを楽しみながら、欺瞞のレトリックの深淵を覗くことができる。(2019. 3. 31 刊)

■『[語りの言語学的/文学的分析](#)』郡仲哉・都築雅子(編) ひつじ書房 (定価 4000 円 + 税)



本書は、編著者の一人が実際に大学のゼミで『ハリーポッター』の英語版と日本語翻訳版を取り上げ、事態把握の観点から比較を行ったことがきっかけで編まれたものである。内・外のいずれの視点から語るか、という問題については、川端康成

の『雪国』の冒頭文をサイエンスデッカーによる英訳と対比させて紹介する事例が非常に有名であるが、本書はそれを『エミリー』(英文学)、

『巨匠とマルガリータ』(ロシア文学)、『夢十夜』(日本文学)という3つの文学テキストを用いて、多角的かつ精緻に分析したものである。

前半部の第1~4章では、文学テキストを分析する際の要となる「視点」とそれにまつわる諸概念について、4人の研究者がそれぞれの切り口で執筆している。中でも、日英語の例文を豊富に上げながら、主観的・客観的事態把握と間主観性についてこれまでの代表的な研究成果を紹介した第1章は、非常によくまとまっており、理想的な導入になっている。

後半部の第5~7章は、冒頭に挙げた3つのテキストについての分析が提示されている。第5章の『エミリー』では、英語の原文と、神鳥訳・村岡訳の2種類の日本語訳が比較されているのだが、前者が日本語らしく主観的把握を多用した表現になっているのに対し、後者は原文に忠実に訳しているためか、より英語らしい客観的な表現になっているという。第7章の『夢十夜』は、英語訳だけでなく後半にロシア語も含めた3言語の比較も提示されており、この種の比較研究の醍醐味が十分に味わえる内容になっている。(2019. 3. 27 刊)

■『指さしと相互行為』安井永子・杉浦秀行・高梨克也(編) ひつじ書房(定価 3800 円+税)



本書は、人間を人間たらしめている、人間がもつとも頻繁に用いるジェスチャーの一つ、指さし(ときには指以外も使用するので適宜ポインティングという)ことばを使用している)に焦点を当て、「会話分析の手法を用いて多様な相互行為の観察を行った

研究の成果をまとめることを目指した」(まえがきより)国内外初の論文集である。

本書には2通りの読み方がある。冒頭第1部の「総説編」は、指さしについて関連のあるこれまで先行研究について詳しくまとめられている。これはジェスチャー研究の概観ともなっているため、多くの研究者にとって非常に有用な取りまとめであると言えるだろう。もう1つの読み方としては各研究者の分析の研究の成果と

しての第II部「分析編」から読むことである。しかしせっかくなので、「総説編」から読むことを勧めたい。(2019. 7. 25 刊)

■『文節の文法』定延利之 大修館書店(定価 2000 円+税)



「文節」という単位は日本語研究のトレンドからは取り残され、ほぼ打ち捨てられていると筆者は言う。なるほど、そうかも知れない。しかし、さまざまな実例をもとに現実を切り取るようとする本書を読むと、「文節」という概念ほど大切なものはないのではない

かという気になってくる。

「文節」を解明するため、「組み合わせの文法ときもちの文法」「きもち・権力・会話を取り入れた文法」「非流ちょう性の文法」「細切れの文法」という章立てで編まれた本書は、徹頭徹尾、文節とは何かを丁寧に説明していく。それは、「文」を絶対視したことばの組み合わせの議論に終始してきた従来の文法では十分説明ができなかった様々な現象を読み解いていく(紹介文より)作業でもある。

実例は記号で紙媒体の分かりにくさをカバーしているだけでなく、発話の音声やビデオをインターネット上にアップしているものもあり、URL付き。複数人で読み、音声を検証しながら読み進めるのも一興ではないだろうか。

(2019. 8. 1 刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We

invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■秋も深まってきました。読書の秋、食欲の秋、様々な秋がありますが、皆様にとりまして、この秋はどのような秋でしょうか。今年は例年よりも大会がやや早めに設定されておりましたため、ニューズレターも常よりも少し早めの発行となりました。皆様のお手元に多少は早めに情報が行き渡りましたならば幸いです。（秦かおり）

■読書の秋、食欲の秋と申しますが、我々の業界では「学会の秋」ですね。今年度の大会は京都で開催されるため、ホテルが予約できない会員が続出するのではないかと危惧しておりますが、京都のような観光地の方が、かえって皆さんの旅行準備..... じゃなくて出張準備も素早いのではないかと、仮説を立ててみました。なお、この仮説は約一名の経験則に基づいております。（尾谷昌則）

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 42 号  
発行：日本語用論学会広報委員会  
発行日：2019 年 10 月 21 日

[広報委員会]

- \* 委員長：尾谷昌則
- \* Newsletter 編集担当：秦かおり
- \* 公式ホームページ担当：尾谷昌則
- \* 会員メーリングリスト担当：金丸敏幸

E-mail: [webmaster@pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster@pragmatics.gr.jp)